

# 相手に伝える力を育てる

ことばには、大きな機能が二つあると考えられます。思考の手段と情報伝達の手段です。抽象的なことを考えたり、情報を伝え、共有するためにはことばがあった方が便利です。この連載でお話している、例えば形容詞が分かるとか、文で話せるとか、質問に答えるとか、そういった日々の指導目標は、つまりはお子さんが自分で考え、相手に伝えるという大目標へのステップと言えます。今回は、この情報を伝達する上で大切なコミュニケーションの態度についてのお話です。

## 態度

### 「ことば」ではなく「ことば」

「情報伝達」などと難しそうに言っても、行なっているのは「相手に向かって話す」という行動です。ここで大切なのが、「相手に向かって」という部分で

す。伝えるという機能は、話す能力以上にこの態度の部分によって成立しています。例えば、ボールが欲しい場面でお子さんが身ぶりサインをするのか、写真カードを手渡すのか、「ボール」と単語だけ言うのか、「ボールを貸してください」と文で言うのか、表現はどれでも構わないと思います。

では、私たちはどんな態度を見たときに、相手が伝えようとしていると判断するのでしようか？ それは、視線や体の向きなどで、相手の注意が自分の方に向けられていることを意識し、それによって自分に何か伝えようとしていると判断しているのです。ですから、お父さん方、新聞を読みながら家族に何か言っても、自分が言ったつもりになっているだけで、相手には伝わらないのですよ。話が横道に逸れました。閑話休題。

相手に伝える力を育てる指導において

重要なことは、「ことば」ではない「ことば」、コミュニケーションの態度です。

具体的には、視線、体の向き、立ち位置などを、やりとりが終わるまで維持することです。

ただ視線が合いくいお子さんに、「目を見なさい」と言っても、難しいと感じることがありませんか？ もちろん、相手の目を見た方がいいですが、別に目でなくても口元や髪の毛の生え際など、ともかく相手の方向を向き続けていることでもよいと思っています。また、相手との距離が近いと相手の顔を見ることが難しいようです。例えば、状況によって二メートルくらい離れた方が、楽に「相手の方を見ている」感じを与えられることもあります。相手との距離はぜひ工夫してみてください。

## 他者に伝える場面を作ろう

個別指導の場面では、保護者にお手伝いいただき、子どもは私のところから保護者のところへ「○○をもらってきて」と頼まれてメッセージジャーボーイ・ガールとなる課題を設定します。お買いものごっこの要領です。

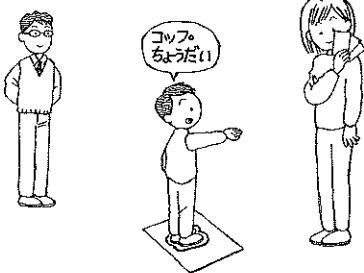
主なポイントを挙げます。

### ①課題ルールの理解

やり方が分かっているなければ、その課題を通じて新しいスキルを学ぶことなどできません。まずは、何をすればいいか理解してもらいましょう。

机上課題で絵カードなど選べるお子さんであれば、机上と同一要領で移動して絵カードを取ってくる課題から始めます。数メートル離れた地点で保護者に絵カード数枚を子どもに見えるように持っていていただき、お子さんに取ってきてもらいます。取ってくるルールがつかめているようであれば、取りに来たお子さんに「何をもらいに来たの？」と声をかけつつ、その名称を表出させます。はじめは模倣でも構いません。移動して、何か言って、絵カードを持って帰ることを示

覚えたら、保護者には絵カードを裏返す、手の中に隠すなどして子どもから絵の内容が見えないようにしてもらいます。これで、伝達する状況が整うこととなります。はじめは、絵カードが見えなくなった途端ルールが分からなくなったり、伝える以外の他のことが気になって「何をしに来たか」忘れてしまうお子さんも多く見られます。何かしながらやることを覚えておくという行動は、大人が思う以上に難しいものです。チラチラと見せつつ、課題ルール学習を進めましょう。



### ②伝達前の注目

移動してきて、用件を伝える前までに必要なスキルは、適切な距離で立ち止まり、相手の方を見て、相手を見ていることです。「適切な距離」が分かりにくいようであれば、いすを用意したり、足型を書いた紙などを相手の一メートル弱手前の床に置いて、そこに立つことを示

### ③伝達中、伝達後の注目

します。相手への注目は、裏返しの絵カードを大人が自分の顔の前でヒラヒラさせるなどの工夫で、お子さんの注意を引いてください。

伝えている時は相手の方を見ている、言い終えたら全く見ていないお子さんは、意外に多いものです。お子さんにとって、カードを受け取る前に言い終えた時点で、すでにやることは終わってしまっているのでしょうか。しかし、待っている時、もらう時の視線やひたたくらずに受け取る行動は、非常に大切なコミュニケーション行動です。それは、相手を意識してペースに合わせることで求められる行動だからです。②で述べた要領で注意を引き続けたまま渡すことから始め、徐々にわざと探すふりをするなどで時間を稼ぎ、それでも注目を維持して待つことを教えてあげてください。

課題場面でもできるようにしてきたら、家や学校でも似たような場面を設定して試してみましよう。どこでも、誰が相手でも、相手に注目して話すと「伝わる」ことをお子さんに実感してもらえることが第一です。